

我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。

一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。

すでにこの道あり。必ず度すべし

(善導『観経疏』二河譬、聖典219・220頁)

すでにこの道あり 必ず度すべし

第12組 廣圓寺 住職

松岡 満雄

text by Manyu Matsuoka

「浄土真宗における救いとは何か」というテーマを与えられたので、我が身の病を通して考えているところを述べてみたい。「救い」を表現することは非常に難しいが、少なくとも、念仏して死んだら花咲く極楽へというようなことではなかろう。また、いくら高僧方の説を引用しようとも、宗祖が「親鸞におきては～」「親鸞一人がため～」（歎異抄）と仰るように、自分を通して頷いた話でなければなるまい。清澤満之師も「私が毎日毎夜に実験しつつある～」と『我が信念』に残しておられる。

2010年、大腸癌を発見し既に肝臓に転移していた。その後肝臓を4回手術した。癌と闘うというような気持ちはなく、そもそも癌も我が身。私が癌になるのではない、癌の私しかないのである。引き受けていくしかない。「見老病死悟世非常」（大経）をよく法話の題材としてきたが、他人（外）の老病死でなく、我が身（内）の老病死であった。諸行無常の道理を、他ならぬ我が身が証明しているのであった。「無有代者」（大経）とは、癌の身であろうと、生命あるということは、お前にはお前にしか出来ない人生を生きよという命令を賜っているのだということ。

入院しながら自分の歩みを振り返ってみた。在家であったが仏教に関心を持ち、大谷大学短期仏教科に入ってみた。補導教員が小川一乗先生であったのが

大きな仏縁。「(解放とは)生老病死を生きながらそれらが苦という意味を失っていくこと」(小川一乗『大乘仏教の根本思想』法蔵館)と教えられた。生老病死が消えてなくなるわけではない、意味が変わっていくのである。自分の都合のよいように外を変えるのではない、その勝手な都合を問えということ。仏教の根本は覚、仏陀とは覚者であった。大乘の菩薩の誓願を教えられ、「そうなのだ、自分も同じように修行を積んで迷える人を救ってあげよう」などと思いがあっていったのが、実はこの自分が「救われる側の存在」であったと思いついたことである。

卒業後、小川先生のご縁でご令妹鈴木章子さんが坊守・園長を勤める斜里の西念寺及び幼稚園に勤務。当時はお元気であったが、やがて癌を患う。「章子、還るところはみんなひとつ、お前も安心しておいで」(章子さんの講演記録)というご実父小川殊諦師を通しての仏様の言葉が、生身の人間の声となりこの自分にまで伝わった。人から人へという法縁の広がりが有り難いことであった。

それからあちこちで章子さんを紹介してきたが、いざ自分が癌になると、それまでいかに頭だけの理解、口先だけの言葉であったかと痛感。今度は自分自身の病室が法座の一等席となった。単調な入院生活だが、「(摂取不捨とは)この世に無駄なしということ」(鈴木章子『癌告知のあとで』探求社)、「この世に雑用という名の用はない。用を雑にしたときに生まれる」(渡辺和子『面倒だから、しよう』幻冬舎)というような、視点の逆転があった。また、身はベッドに寝ていながら心は家庭のこと将来のことを心配する己のあり方にまさに「煩は身を煩わす、悩は心を悩ます」(唯信鈔文意)であると苦笑したり、見舞いの人との一期一会を味わったり。今現在説法があふれていた。

教区内で長らく差別問題を担当してきたが、到達したのは、自分自身との出会い直しであった。既にこの道ありと、還るところを示して下さった先人に導かれ、「絶対無限に乗託」(「絶対他力の大道」)して、いのちのあらん限り満足・納得の道を歩む。それが自分なりの救いである。